

「神の賜物は永遠のいのち」

ローマ6：20—23

堀田修一 23・4・16

I 「あなたがたは、罪の奴隷であったとき、義（義なる神）については自由にふるまっていました」

：20。私たちは、主を信じ救われる前は、「罪の奴隷であった」＝私たちは罪に抵抗することができず、罪に服従して生きていた。奴隷であるか自由であるかが問題なのではなく、何に対して奴隷であるか自由であるかが重要です。人間には、何も主人としない完全な自律、自由はありえない。義（義である神）に対して良い関係がないときには、罪の奴隷となり、義（義なる神）については自由に振る舞ってしまう。罪人である人類の姿＝「義人はいない。（真の神の存在や神のみこころの義、自分の罪を）悟る者はいない。神を求める者はいない。すべての者が（神から）離れていき、だれもかれも無用の者となった。善（神の前に全く正しい義）を行う者はいない。だれ一人いない」（ローマ3：10—12）。主を信じる前の私たちは、このみことば通りの人間だった。しかし、今、自分の罪を悟り、神を求め、主を信じ、救われ、神の喜ばれる義を行いたいと願い、祈りつつ歩んでいる。これは私たちには不可能だった。私たちが、いただいたこの偉大な救いは、神の奇跡、神の愛、憐れみである。心から感謝します！

II 「ではそのころ（罪の奴隷であった時）、あなたがたはどんな実を得ましたか。今では恥ずかしく思っているものです。それらの行き着くところは死です」：21。私たちが罪の奴隷である時に結ぶ実は→「淫らな行ない、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酪酊、遊興（詐欺による富での豪遊の悪、他）」（ガラテヤ5：19—21）。「人から出てくるもの、それが人を汚すのです。内側から、すなわち人の心の中から、悪い考えが出て来ます。淫らな行ない、盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさ、これらの悪は、みな内側から出て来て、人を汚すのです」（マルコ7：21—23）。これらは、恥ずかしく思われるものです。と同時に、これらの罪は、私たちの心にあり、心の罪の性質の実として行いに出るのです。それらの行き着くところは、死（永遠に神と離れるという死、神の正しいさばきによる罪に対する刑罰＝「火と硫黄の池（地獄）に投げ込まれ…昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける」（黙示録20：10）「いのちの書に記されていない者（地上で主を信じなかった人々。死後に救いのチャンスはない＝聖書の明確な真理）はみな、火の池（永遠に苦しむ地獄、滅び）に投げ込まれた」（20：15）。私たちが主に救われていなければ、本来は、こういう意味の死＝救いの神から離れたままの永遠の苦しみ、地獄に行き着く者だった。この滅びから救われた驚くべき恵みを心から感謝しましょう！

Ⅲ「しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得ています。その行き着くところは永遠のいのちです」：22。私たちは、神から離れ、罪の奴隷となり、罪の実を結ぶ人生を送っていました。その私たちに「しかし今は」と言われます。これは、全く新しくされた人生を表わす画期的なことばです。主を信じ救われ、主人として縛っていた罪から解放されて、真のご主人である恵みとまことに満ちた神の奴隷（しもべ）となる時、新しいいのちと力が与えられ、聖潔に至る実をいただきます。「聖潔（原語：聖別＝神に自分を献げ、神のために自分を「取り分ける」）に至る実」とは、キリストにあって（主と霊的にいのちの結合がなされる。霊的なぶどうの木である主に、霊的なぶどうの枝である私たちがつながり、主から私たちは霊的な養分をいただき続ける）結ぶ御霊の実＝「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」（ガラテヤ5：22, 23）。これらの素晴らしい実を御霊なる神は、私たちの心に、人生に結ばせてくださるのです。感謝します。私は欠けだらけのクリスチャンですが、主を信じる前の罪の奴隷の私に比べれば、私の心に内住されている聖霊は、私の心と人生に試練や苦しみの中でも、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制を実らせておられることが分かります。「その行き着くところは永遠のいのちです」。ここには、20, 21節との対比があります。つまり、「罪の奴隷である私たちの行き着くところは死です」に対して、「神の奴隷、しもべとなり、聖潔の実、御霊の実を得ている私たちの行き着くところは永遠のいのちです」という対比です。何という違いでしょう。私たちが主を信じ救われていなければ、私たちの行き着く最後は「死（永遠の苦しみ、永遠の滅び、永遠に神と分離する）」だったのです。しかし、主を信じ救われた今は、私たちの行き着く最後は「永遠のいのち」です。永遠のいのちとは、主を信じた時から、与えられる素晴らしいいのち。永遠のいのちとは、ただ長く続くいのちではなく（病や絶望のまま長く続くいのちは幸いではない）、永遠に（地上でも、天国でも、主の再臨後の新天新地でも）素晴らしい三位一体の神との愛の交わり（神との分離の真逆の恵み）の中にいかされるいのちです。この永遠のいのちが自分の罪を認め主を信じ救われる瞬間から神により与えられる驚くべき恵みを心から感謝しましょう。

「罪の報酬は死です。しかし、神の賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです」：23。「報酬」の原語は、「給料」のこと。主を信じる前の私たちは、罪という主人に仕えている。せつせと罪、悪のために汗を流し、罪のために時間を費やして生きている。罪はそういう私たち人間の働きに対して、私たちに給料、報酬を与えてくれる。罪に仕えた私たちに与えられる報酬、給料は「死です」。罪という主人が与える「死」とは、肉体的な死である以上に、「霊的な死」＝いのちの源である神から切り離されるということ。神との分離、これこそが、23節が語る「死」の本質。その死は、神の正しいさばき、刑罰である永遠の滅びを意味する。「いのちの書に記されていない者（地上に生かされている間に主を信じなかった人々）はみな、火の池（世々限りなく苦しみを受ける所。黙示録20：10）に投げ込まれた」黙示録20：15。私たちが主を信じ救われていなければ、地上で神と交わることができず、また、死を迎える時には、天国に行くことができず、永遠の滅びという死、火の池に投げ込まれるはずだった。しかし、私たちの罪のために十字架で血を流し、身代わり私たちの罪の刑罰を完全に受けられ、私たちの罪の身代わりとしての主の十字架の死＝私たちのすべての罪の贖い、償いが完全に完了し、神に完全に受け入れられ、神の正しい義が完全に満足させられた保証、承認として主イエスは、死に勝利し、三日目に復活されたのです！ハレルヤ！「しかし神の賜物は、私た

ちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです」：23。

①「賜物」とは、無料で気前よく与えられるプレゼント。罪が与えるのは、死（永遠の滅び）という「報酬、給料」だった。しかし神が下さるものは「賜物」です。贈り物、ギフト。すべて無料の気前の良いプレゼント。神は報酬を払う事はなされない。なぜなら、私たち人間の中に、神に報酬を求めるほどの罪のない純粋な人生を送れる人はいないからです。そこで、神は、無料で、自由に、恵みとして賜物、プレゼントとして救いを下さる。人間の功績によらない、ただ神の憐れみのプレゼントです。

②主を信じる者に、神が気前良くプレゼントして下さる賜物は、「永遠のいのち」。「永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知る（原語：知り続ける）ことです」ヨハネ17：3。永遠のいのちとは、御父と御子を知り続けること。「知る」とは、生きたふれあい、交わりを意味する。つまり、永遠のいのちとは、主を信じ、新しいいのちをいただき永遠に御父と御子と交わり、神を深く知り続ける祝福に満ちたいのち。その神との幸いな交わりを助けられるのが第三位格の聖霊なる神。自分の罪の報酬として「死（永遠の滅び、苦しみ、神との分離）」に行くべき私達を主は救い、「永遠のいのち（永遠の救い、神との親しい愛の交わり）」を与えて下さり感謝します！